

下関市唐戸市場の変貌における場所論的意味

—一九三三年と二〇〇二年—

荒 木 正 見

序

小論は二〇〇二年（平成一四年）の山口県下関市唐戸市場における変貌を、かつて一九三三年（昭和八年）に大規模に起った変化と比較して、その変化の意味と未来への展望を考察しようというものである。考察の手段には、西田幾多郎の場所論から敷衍した理論を用い、哲学的な視点から論じることの主目的とする。従って小論では、最終的に導かれるべき具体的な施策については抽象的な方向性を述べざるを得ないが、論理的な展開の方向を延長して現実化する基盤となるべく考察するつもりである。

一．西田幾多郎の場所論

西田幾多郎の場所論については、筆者はすでに各所で論じてきたので、ここでは筆者が事典項目に執筆したものなどを参考にし、^①、その要点のみを列記し、以下必要に応じて詳細に言及する。西田幾多郎の理論の基本的な構造は以下のように示すことができる。

①場所の唯一絶対無限性

「場所」とは唯一、絶対、無限な存在そのものとされる。すなわ

ち哲学的伝統における「存在」そのものを西田幾多郎は「場所」と呼ぶ。そして場所の全体を認識しようとするそれは「無」と捉えられる。

②場所の自己限定性

場所は唯一、絶対、無限であるから、個物や個々の出来事、個人、個体などの「個」は場所自身の自己限定もしくは自己規定によって成立する。

③個による場所の限定性

他方、個の成立と発展、自己表現などは、全体としての場所に多様性を与え、場所を豊かに発展させ、また、個を通してはじめて全体が認識される。

④場所の歴史性

②③の双方における限定は逆方向ながら同時に成立し、「絶対矛盾の自己同一」という西田哲学独自の概念の一端である相互矛盾的運動であるが、それによってむしろ個と場所との双方の意味が確立し、双方の同一性が確保される。この運動は現実的には、歴史や生育史に結果として現れている。すなわち、歴史や生育史に個や場所の同一性、すなわち本質的な意味の方向性が示される。

さて、小論で特に注目するのはこの「④場所の歴史性」である。一九三三年（昭和八年）の唐戸市場の成立にはどのような歴史的背景があったのか。考察はその点を軸にして展開される。

二、二〇〇二年の唐戸市場あたり

『ゼンリン住宅地図一九九〇 下関市No.1』²⁾と『ゼンリン住宅地図二〇〇二 下関市No.1』³⁾とを比較すると、以下の相違が指摘される。(図1、図2参照)

前者において、国道九号線の南、唐戸町五には、関門ビル、唐戸市場即ち下関地方卸売市場の三号棟、四号棟などがあり、唐戸町六には、五号棟、六号棟および山口忠石下関給油所、駐車場などがある。また、三号棟の向かい、中之町一の亀山八幡宮南西下には、下関地方卸売市場の一号棟などがある。

そして後者においては、唐戸町五と唐戸町六の区画が変更され、国道九号線に面していた三号棟、四号棟は撤去され、その場所は跡地に残った関門ビルとともに唐戸町六に編入されている。また、先に唐戸町六の山口忠石下関給油所、駐車場の南にその東隣りの阿弥陀寺町とにかけて存在していた突堤に囲まれた入江は埋め立てられ、給油所、駐車場はなくなり、その地はすべて下関市地方卸売市場唐戸市場市場棟の敷地となり、それが新たな唐戸町五という区画になっている。中之町一の下関地方卸売市場一号棟はこの地図では存在するが地図印刷直後に撤去されている。ちなみに二号棟は唐戸町四の国道九号線北側、現在のカラトピアの地にあったが昭和六一年（一九八六）一月に開業したカラトピア建設のため撤去された。

さらに、二〇〇二年一月現在の様子は以下の通りである。

新たな唐戸町五には先に述べたように、新唐戸市場、正式には下関市地方卸売市場唐戸市場（唐戸町五番五〇号）がある。新規開業は二〇〇一年四月二十六日であり、市場棟の敷地面積は一万七五一平方メートル、建築面積は八〇八〇平方メートル、延床面積は一万四四七四平方メートル、また、駐車場棟の敷地面積は四六三二平方メートル、建築面積は三六一六平方メートル、延床面積は九六八三平方メートル、両棟とも三階建てプレキャストコンクリート造りの曲面を活かした近代的なデザインの建築である。旧唐戸市場以来の特徴的制度、一般的なせり売り以外に、特殊関連事業者すなわち他の卸売市場や漁港から持参して直接販売する業者や、生産者立売人すなわち直接販売する漁業や農業の生産者なども売ることができる制度も継承され、業者のみならず一般消費者も利用している。さらに基本コンセプトは、市民の台所、観光の拠点、周辺景観との連続性とされている。

新たな唐戸町六の主要施設はカモンワーフ（唐戸町六番一号）である。開店は二〇〇二年四月二四日、物販、サービス、飲食関係の店舗を有する複合施設である。運営会社はその施設に拠点を置く下関フィッシャーマンズワーフ株式会社（一九九九年二月三日設立、資本金二億二千万円）で、業務概要については、一 観光開発に関する企画、調査およびコンサルタント、二 不動産及び動産の賃貸、管理保有並びに運用、三 駐車場、コミュニティホール、アミューズメント施設等の企画、運営、四 食料品、観光用土産物の企画、立案及び販売、五 飲食業の経営、などとされている。また、敷地面積は二九六〇平方メートル、延床面積は約三六五〇平方メートルであり、建物は、鉄骨造二階建（一部三階建）であり、建物以外の

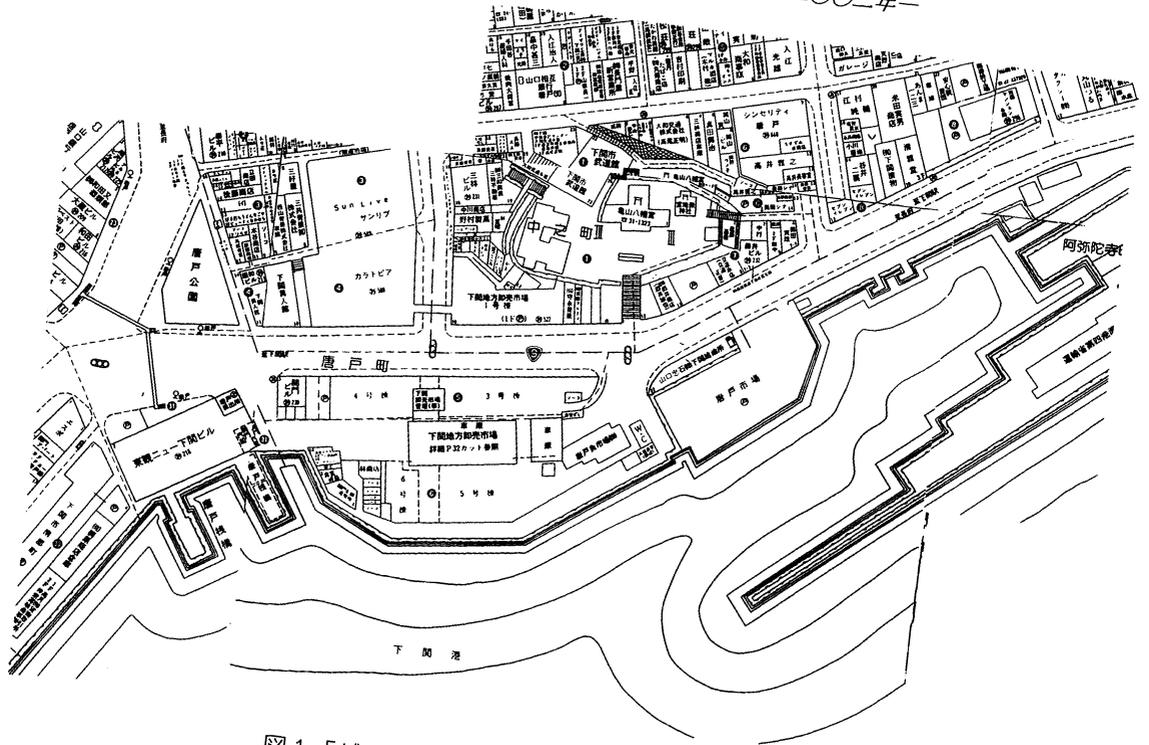


図1 「ゼンリン住宅地図 1990」における唐戸付近

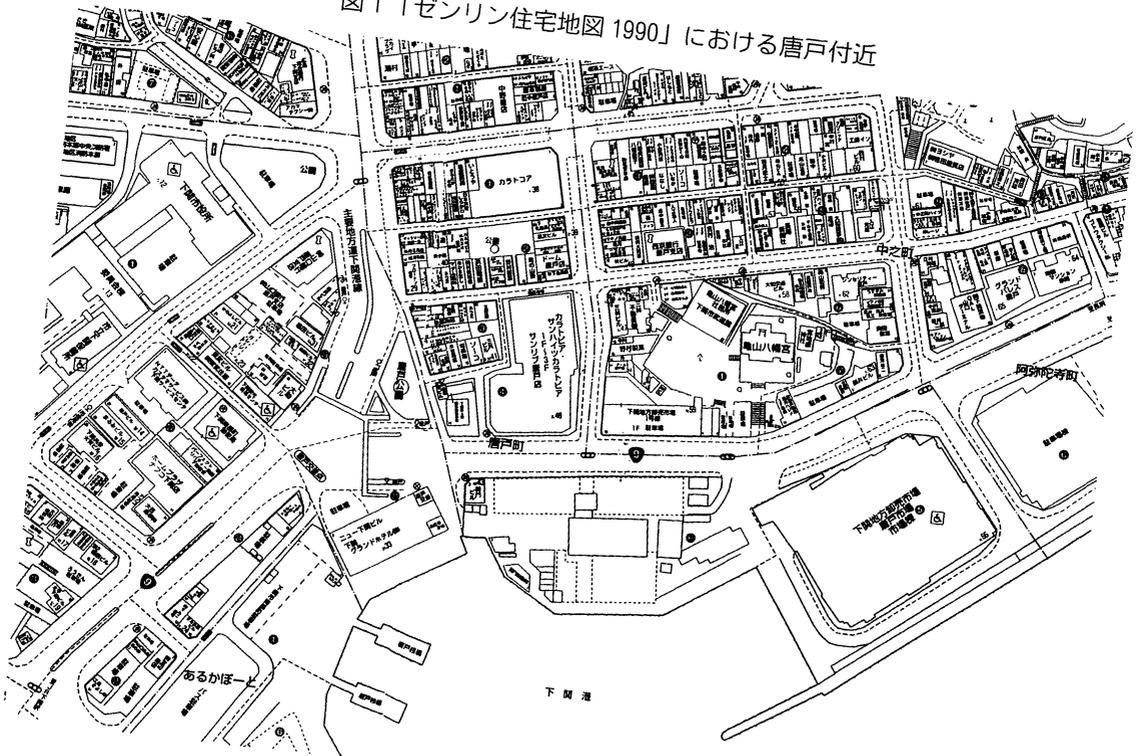


図2 「ゼンリン住宅地図 2002」における唐戸付近

ほとんどの敷地スペースは駐車場である。設計は地元の早川金助建築研究所であるが、大きな階段を持つ中央の吹き抜けに象徴されるオープンモール、海峡に面したデッキをモチーフとした開放性、ボードウォークなどを有している。入居している約四五店舗のうちサービス関係の二〜三店舗を除けば、レストランと食品土産物雑貨等販売とが数的にはほぼ半々である。レストランを中心とした客席数は約六〇〇席とされている。「食べて遊んで海を感じる」というキャッチコピーからも明らかのように、全体において観光を強く意識した施設だといえる。

さらに中之町一の旧市場一号棟跡地は、現在ほとんどのスペースを駐車場とし、南西角にはビアレストラン・ア・ラ・カトラが開店している。今回解体するまでは市場一号棟の建物が亀山八幡宮の石垣および正面石段に密着していた。『幻の童謡詩人「金子みすゞの世界」展図録』⁴⁾所収の写真(一一二頁)でも明らかのように、以前、石段のすぐ西下には金子みすゞが一九三〇年(昭和五年)三月九日に最期の写真を撮った三好写真館が市場に食い込むような形であった。市場の建物には商店や会社が入居していたが、最近はかなりのスペースが駐車場になっていた。なお、市場屋上は亀山八幡宮の境内の延長として玉垣に囲まれていた。そこは、やはり近年は駐車場であったが、行事なども行われた場所でもあった。

さて、小論の視点からこのような現状の背後に垣間見えるのが、場所の自己限定と個による場所の限定との相互作用による歴史的なダイナミズムである。

すなわち、まずここで起ったことは、二〇〇二年を契機に、町の一区画以上が消滅し、新たな施設として再生したということである。

そして消滅したほとんどの施設、旧唐戸市場は一九三三年(昭和八年)に作られたものであった。

では、その年一九三三年には何か今日に通じる意味があるのだろうか。それには唐戸市場や下関という場所の本質の意味がどのように関係しているのだろうか。唐戸市場の変貌の意味を、先に述べた「④場所の歴史性」から考察する焦点はこの点にある。その際、①③の場所論の構造を、この歴史的事柄の解説に当てつつ考察することはいうまでもない。

三. 唐戸市場の意味

唐戸市場の意味を考える場合、まず場所と個の関係として、a. 世界を場所と捉え下関を個と捉えてみるという側面からの考察と、b. 下関を場所と捉え、唐戸市場を個と捉えてみるという側面からの考察とが指摘される。

とりあえずはb. から考察する。

まず、①場所の唯一絶対無限性や②場所の自己限定性に関して考察すれば、下関の絶対的条件、すなわち大きくは変化しないものに言及しなければならぬ。それは、地形や位置や気候である。

旧版『下関市史 原始—中世』⁵⁾には、その冒頭にそれらについて以下のように述べられている。

まず経緯度であるが、「市役所の位置は東経一三〇度五七分三七秒、北緯三三度五七分一六秒」とされ、「下関地方気象台の位置は東経一三〇度五六分三六秒、北緯三三度五七分六秒」とされている(三頁)。なお、この下関地方気象台は当時名池町にあったもので、その前身は明治一六年に全国で一九番目に開設された気象測候所で

ある。一九七八年（昭和五三年）に現在地、竹崎町四丁目の下関地方合同庁舎内に移転した。この経緯度の意味はいくつか指摘できるが日本の中心からは西に離れて大陸に近いことが最も特徴的である。これは次の地理的位置の節でも「本州の最西端ということ、海峡によって九州とへだてられているということ、朝鮮海峡によって朝鮮と向かいあっているということ」（四頁）と述べられているとおりでもある。

また気候は、冬は裏日本式気候のやや和らいだ北九州式気候、夏は瀬戸内式気候の西部と似た型ということで総合的に北九州式気候とされている（一七頁）。中九州や南九州ほど温かくはないが比較的過ごしやすい気候である。また、「風は下関の名物」（一九頁）と述べられているように特徴的なのは風だとされる。「広島は三倍、福岡の二倍も風の日がある」とされ、「下関の風は東風か西風ないし北・西北の風が年中卓越する」と述べられるように（一九頁）、風がよく吹いて風向も比較的決っている。そしてこのことは、「下関海峡の風が強いことが、また一面では潮待ち港としての下関の存在を意義づけた」（二〇頁）と、港発展の理由のひとつに挙げられている。

さて、このような下関の絶対的条件とそれによって生み出された諸々との個々の発展とが相互に働き合って下関の歴史を創ってきたのである。

そこで、このことを意識しつつ、場所論の論理構造に沿って一九三三年に至る唐戸市場の歴史を新版『下関市史 市制施行―終戦』^⑥に拠って確認する。

一九三三年（昭和八年）に成立した唐戸市場は、『下関市史 市

制施行―終戦』二三二頁の表1に示される通り、青果市場と魚市場の合体したものである。

まず、青果市場、すなわち唐戸魚菜市場の成立については次のように述べられている（二三三―二三八頁）。

明治時代半ばより唐戸棧橋通りには自然発生的に青果市場が生じていたようである。このころの唐戸付近は、『下関市史 市制施行―終戦』表紙裏見開き掲載の一八九二年（明治二五年）当時の地図「赤間関市細見図」でも明らかのように、龜山八幡宮がすぐ海に面し、主要道は龜山八幡宮の北側であった。また入江は現在も残る英国領事館の前に西ノ端まで深く入り込んでいた。そのような地形で龜山八幡宮西南下に税関が置かれその西周辺に棧橋通りがあったことになる。

一九〇九年（明治四二年）に、市条例を制定して、唐戸の一部を市場取引の場所と定め、区域一枚につき五厘を徴収したとされる。さらに一九一六年（大正五年）には市場規則と使用料条例が制定され、翌一九一七年（大正一六年）より下関市青物市場となったとされている。

また、このころの市場の利用者は平日一日平均約五千人で、盆、正月、祭礼には数倍の利用者があったという。商品は果実（主にバナナ）、野菜、盆栽、鶏卵、干物などで、野菜果実が九割だったとされる。

昭和二年（一九二七）に唐戸の暗渠改修工事はじまったことで市場は分散したとされる。これは、明治時代以降徐々に龜山八幡宮の南の埋立が進み、このころには、現在の国道九号線が開通する下地が出来つつあったことを意味する。

『下関市史 市制施行―終戦』裏表紙裏見開き掲載の一九二九年（昭和四年）当時の中心市街図には、龜山八幡宮の南に埋立地が広がりつつある様子が示されており、後述する山陽電軌鉄道の路面電車が長府から伸びてきて壇之浦まで届いている様子が見て取れるが、現在の国道九号線に相当する道路は未完成である。

また、『しものせきなつかしの写真集 下関市史・別巻』^①所収の写真「龜山八幡宮からの写真（昭和五年）」（一一九頁）には、一九三〇年（昭和五年）に龜山八幡宮南の海岸付近が整備されている様子が写っている。

『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』^②に掲載されている吉田初三郎が描く「山陽電軌沿線案内図（一九三二 山陽電軌鉄道株式会社）」（七〇〜七二頁）には、一九三二年（昭和七年）にすでに山陽電軌鉄道の路面電車が、長府駅から唐戸を経て東駅、幡生駅に至る路線が記されている。『しものせきなつかしの写真集 下関市史・別巻』には、この山陽電軌鉄道の路面電車は、一九二五年（大正一四年）に幡生と東下関間で走ったのに始まり、続いて一九二六年（大正一五年）に長府松原と壇乃浦間で開通、一九五三年（昭和二九年）に幡生から彦島口に開通して長府から彦島口の最長区間の営業となったが、一九七一年（昭和四六年）に全線が廃止されたと述べている（五六頁）。

これらの路面電車の開通を含めた唐戸付近の変化は、一九二一年（大正一〇年）に始まった下関港修築（第一期修築工事）という大事業と密接な関係がある。すなわち、港湾を中心とした交通の要衝として下関全体の都市整備が綿々と加速されていったのである。一九二三年（大正一二年）には、国鉄下関駅舎の改築も行われている。

市営唐戸棧橋が設置されたのは道路整備等がほぼ一段落した一九三〇年（昭和五年）であるが、それから唐戸市場も一気に変革の時を迎えることになる。『下関市史 市制施行―終戦』を参考にして（二三九〜二四二頁）、まず青果市場の年表を作れば以下の通りである。

一九三一年（昭和六年）唐戸一帯の道路改修。

一九三二年（昭和七年）五月下関唐戸魚菜市场起工。

一九三三年（昭和八年）三月落成。

一九三四年（昭和九年）青果部の卸問屋一〇八軒を統合、下関市

中央青果株式会社を組織、一号上屋で開業。

次に『下関市史 市制施行―終戦』を参考にして（二三九〜二四二頁）、下関の魚市場の推移を簡潔に述べれば以下の通りである。

古来魚市場は、四十物（あいもの）仲間といわれて自然発生的に各地にあった。

二〇世紀初頭には、東部、中部、漁港、西部などの市場があった。漁港を除く各市場の経緯は次の通りである

東部は、下関魚菜市场鮮魚部の前身で、阿弥陀寺第一・第二魚市場であった。

中部は、他が消費市場であったのに対して卸売市場として発展した。四十物組合が一九一六年（大正五年）に下関鮮魚問屋組合になり、一九二九年（昭和四年）に岬之町に統合する。一九四〇年（昭和十五年）に市営となり、翌年より市営営業を開始する。一九四二年（昭和一七年）に下関漁港に移転する。

西部は、当初竹崎魚市場および今浦魚市場であったものが東が市

営になるのに伴って新地に統合し市営となった。

一九〇五年（明治三八年）に東部魚市場市営案が出され、一九〇八年（明治四一年）東部（阿弥陀寺第一・第二魚市場）の二箇所を統一。阿弥陀寺魚市場もしくは東魚市場と称する。

一九二四年（大正一三年）には手狭かつ不便な東魚市場を、すでに闇市場があった唐戸に移転する。

一九三三年（昭和八年）唐戸魚菜市场に統合する。

さて、このように示された歴史的推移を対象にして、一九三三年（昭和八年）における唐戸市場の変貌の意味を場所論の視点で説明することになる。

まず、③個による場所の限定性から、すなわち、唐戸市場の側からの下関に対する意味付けを確認すると、特に、歴史的推移の方向性に着目して、一九三三年（昭和八年）の唐戸市場の成立は、近代的統合・合理的運営と量的拡大の画期的象徴だといえよう。すなわち、小規模で自然発生的な各地の市場が発展していく過程で、より大量の品をより合理的に取り扱う必然性の発生に沿って、公的な営業形態を選択し、各地各種の市場を統合し、歴史的にも下関の中心に近く、近代の都市開発の核になった唐戸の中心的施設として設立されたといえるのである。

このことには、先に述べた下関という場所の絶対性が影響していることはいうまでもない。本州の西端という位置的意味については、とりあえずは本州と九州を結ぶ国内交通の要衝であるとのみ述べ、より大きな意味については後に詳述するが、瀬戸内海の西端で人の交流が激しく、しかも当時大規模な流通はまだ船舶に頼っていた時期に、風の強い一帯での商船や漁船の避難所ともいべき港が、流

通の基地としての市場を求めたのは当然だといえる。

しかし、さらに考察は④場所の歴史性を軸に展開する。すなわちここで、一九三三年（昭和八年）開設の意味を考察しなければならぬ。

まず、関連する下関港修築工事の経緯を『下関市史 市制施行—終戦』を参考にして（一九〇—二二三頁）確認する。

一九三〇年（昭和五年） 一九三三年（大正一〇年）から行われ

た下関港第一期修築工事が完成する。

一九三三年（昭和八年）

下関港第二期修築工事の為の「大下関港拡張期成会」決議文が採択される。

一九三八年（昭和一三年）

市制五〇周年、下関港第二期修築工事が起工される。

一九四一年（昭和一六年）

同完成する。

このように矢継ぎ早に下関港が充実していき、その一環としての唐戸市場開設であったことが分かるが、a. の視点を導入すれば下関のその時代は世界や日本という大きな場所の歴史とどのような関連があるのかを考察しなければならない。

その時代の歴史的事実の流れを日本歴史大事典編集委員会編『日本史年表』（三五七—三六〇頁）^③ および日比野丈夫編『世界史年表』（一八八—一九四頁）^④ によって確認すると以下のように示される。

一九二七年（昭和二年）

金融恐慌。

一九二九年（昭和四年）

金融恐慌対策に成果をあげた田中義一内閣は対中国政策の責任を負って退陣。浜口雄幸内閣発足。デフレ政策による

産業の合理化。

一九二九年一〇月二四日 暗黒の木曜日、世界恐慌始まる。日本はデフレと重なって大恐慌になる。拡大政策へと転換。

一九三一年（昭和六年） 満州事変。

一九三二年（昭和七年） 満州国建国。

一九三三年（昭和八年） 国際連盟脱退。

一九三三年 ドイツでヒトラーが首相になる。やがてナチスの一党独裁、国際連盟脱退。

この歴史の一片からもこの時代の変化が窺い知れる。最も基盤となる経済的流れは、恐慌およびデフレという縮小型の経済状況から抜け出そうと、一気に拡大政策へと転換したということである。そのダイナミズムが領土拡大政策を導き世界大戦の時代へと突入していったといえよう。

小島恒久編『一九三〇年代の日本』^①においてもその冒頭に「一九三〇年代を最も簡単に特徴づけると、「恐慌から戦争への一〇年間」ということになる。深刻な世界恐慌の中で一九三〇年代は始まり、資本主義諸国はそれぞれにその「危機」からの脱出をはかったが、その危機打開策がまた新たな矛盾と国際的緊張を生み、それが結局、第二次世界大戦に収斂していったというのが一九三〇年代の流れであった。」（一頁）と簡潔に総括されている。

少なくとも当時の下関はこのような世界や日本の歴史的ダイナミズムの影響を受けやすい場所であった。それは先に、①場所の唯一絶対無限制性や②場所の自己限定性に関して考察したことから導かれる。

先に唐戸市場の立地に関しては、本州の西端すなわち本州と九州を結ぶ国内交通の要衝という位置的意味と、風の強い一帯での商船や漁船の避難所ともいうべき港が、流通の基地としての市場を求めたと述べたが、ここに至って朝鮮半島と向かいあっている、すなわち大陸への玄関口という位置的意味の重要性が浮き上がってくる。

このことは『下関市史 市制施行―終戦』の「前書き」に「明治期における我が国の重点施策の一つとなったのは、富国強兵策だった。対外的には、朝鮮侵略に矛先が向けられるにいたって、西日本地区の国防の拠点である下関は、いち早く要塞地帯に繰り入れられ、重砲兵連隊が置かれた。明治二十七年には、日清戦争が、明治三十七年には日露戦争が勃発し、下関は兵站基地として重要港の役割を担った。」（二九頁）と端的に述べられている通りである。一八九九年（明治三十二年）に赤間関市として市制が施行されるとすぐ翌年一九九〇年（明治三十三年）には下関要塞砲兵大隊が設置されている。日清戦争時の兵站地は中之町の引接寺であった。『下関市史 市制施行―終戦』裏表紙裏見開き掲載の一九二九年（昭和四年）当時の中心市街図には、唐戸から東駅に至る新町の谷に沿って、重砲兵連隊（現在の貴船町三丁目付近）や、下関要塞司令部（同山の口町下関稅務署）、練兵場（同下関運動公園・陸上競技場・梅光学院大学付近）など、軍事施設が配置されていたことが見て取れる。現在も営業している阿弥陀寺町の春帆楼が一八九四年（明治二十七年）の日清戦争の翌年に日清講和会議の場所になったことは下関がいかに軍事上重要な場所であったかという象徴である。

もちろんこの位置は、外国貿易の拠点であることはいうまでもない。唐戸港の充実を図るために埋立て工事が始まったのはまさに日

清戦争の年一八九四年（明治二十七年）であり一応の完成をみたのが二年後であるが、一八九八年（明治三十一年）には特別輸出港に指定されている。また『下関市史 市制施行—終戦』によれば、英国領事館の開設は一九〇一年（明治三十四年）で現在も残っている同建物の建設は一九〇六年（明治三十九年）だとされている（六六九〜六七二頁）。イギリスを嚆矢として、昭和初期までに下関にはイギリス、オーストリア、ハンガリー、ノルウェー、ドイツ、アメリカ、スウェーデン、ポルトガル、オランダなどが領事館やそれに相当する涉外施設を設置した。それほどまでに下関は対外的な拠点であった。

さて、このような位置的な背景と歴史的背景から一九三三年（昭和八年）の下関を省みれば、港湾施設の充実の意味が見えてくる。それはすべての意味において、緊縮的な経済状態から脱出することを目的として内外需要の拡大政策に乗った結果だといえる。下関は世界全体のそのようなダイナミズムによる限定を受けやすい先進地のひとつであった。

そして、唐戸市場もその大きな全体による限定のダイナミズムを蒙ったことはいうまでもない。先に、唐戸市場の成立を、小規模で自然発生的な各地の市場が、より大量の品をより合理的に取り扱うべく発展していった結果であると述べたが、まさに当時の下関は、明治時代から続いてきた発展に拍車をかけなければならないほど急な変貌を要求されていたのである。さらに、唐戸市場のこのような発展は、下関やひいては世界全体に対して格段の自己表現となったといえる。すなわち一九三三年（昭和八年）の唐戸市場の成立は、このような世界全体の場所のダイナミズムと、唐戸市場を取り巻く個としてのダイナミズムとの出会いとして読み解くことが出来るの

である。

しかし、歴史は、この時代の拡大政策の結果をも教えている。

一九四五年（昭和二十年）六月と七月の下関大空襲は、唐戸は勿論のこと、壇之浦町から豊前田までの市街地の殆どを焼き尽くした。秀麗を誇った亀山八幡宮の社殿も焼失した。二二万人を超える人口が、住宅や産業の激減によって終戦直後には一五万人台にまで減少したのである。

四. 比較と将来

以上の考察を踏まえて、一九三三年（昭和八年）と二〇〇二年（平成一四年）との唐戸市場に起った変化について比較し、将来の可能性に向かって考察する。

まず②場所の自己限定性と④場所の歴史性に関していえば、類似性として経済状況が挙げられる。すなわち世界も日本もデフレの只中にあるということである。そのような状況では、かつての日本で行われたような、デフレ政策によって旧来の非合理的経済構造を建て直してより近代的合理的な競争力のある構造に変えるという側面と、その過程での庶民の生活が逼迫し政府が不安定になるという側面とがある。この両側面とも、両者に共通している。

しかし反面、かつてとは異なる点も指摘される。

まず、場所を世界全体の趨勢として捉えれば、国際情勢を考える上で主要な柱であった領土拡大政策の破綻と、世界規模の開発抑制が指摘される。両者が密接に関わっていることはいうまでもない。すなわち、人類の開発能力の爆発的進歩により相対的に地球資源の限界が訪れている。従って無限の資源や無限の領土という幻想は消

え、むしろ限られた資源や領土をどれだけ合理的にかつホメオスタシス（恒常性）を維持しつつ利用していくかという時代になっているのである。これは、産業の変化にも繋がる。大まかな言い方ではあるが、やはり量より質の時代だし、小さく価値あるものへの希求が強まる。さらに、健康や長生きなどの人生の価値へと発展し、やがては文化の復権へと繋がっていく。

下関という場所に注目すれば、これらのことは交通状況の差異性としても指摘される。交通手段はかつてとは比べ物にならないほど大規模運搬とハイスピード移動を可能にした。それは、交通の拠点の位置が変化することを意味する。下関に関していえば、瀬戸内海航路の復権は困難となるし、単に本州の西の端だからという理由での滞在も減少している。船に代わった陸上交通も、新幹線にしろ航空機にしろ発達すればするほど基点の数が減りそれから外れた町を素通りする。すなわち、交通機関の発達が逆に町を寂れさせていく。これは、近隣県としては広島県の尾道、鞆などですで見られてきた通りである。

では、このような場所による限定のダイナミズムに対して、③個による場所の限定性のダイナミズムはどのように働くのだろうか。また、どのように働けばよいのだろうか。

いま、②場所の自己限定性と④場所の歴史性に着目し、主に後者をもとに一九三三年と二〇〇二年の下関を瞥見した限りでは、デフレであれ、交通手段の変化であれ、下関にとって不利な条件ばかりが目立つように思われる。では、場所論の他の視点からはどのような考察できるだろうか。

①場所の唯一絶対無限性と②場所の自己限定性からは、絶対的と

もいべき世界における下関の位置が認識される。それは、日本の中心からは西に離れて大陸に近いことと、風は強いながらも比較的温暖な気候であることなどである。また、量的データからは抜け落ちるが、質的に海峡という景色の美しさを特筆しておかなければならない。

このようなことを踏まえて下関を考察する前に、場所論の立場から①④すべてを統合的に意識して、特に未来すなわち無限な未知を考えるための条件を列挙すれば次のように示される。

大枠としては場所のダイナミズムの方向性とそのエネルギーを意識することである。未来や未知に連なる方向性へとダイナミックに進行するか否かは、エネルギーの量と質すなわち構成との充実度にかかっている。

そこで、変化が課題であるから、歴史的に変化したものや今後変化するものと、変化しないものとを峻別する。

その場合、自然発生的(genetic)発想と規約的(conventional)発想との対比が要求される。すなわち、前者の、自然に生まれてくる変化と、後者の、理想・目標を立てて実行する変化とを自覚し峻別することが必要である。前者の変化は緩やかであるが、確実な方向性を持つ。後者の変化は時として劇的ではあるが、理想や目的の条件の変化に対しては脆い。そして、この両者の変化は、発想の問題であって、同一の事柄に双方の発想を当てはめつつ考察しなければならぬのである。

さてこのような視点から唐戸市場の変化を振り返るが、今度は主に③個による場所の限定性の視点から考察する。

ここで重要なのは、個は個として、瞬間的には規約的発想をもつ

て行動し自己表現するように見えるが、全体からみればそれはむしろ、自然発生的発想に近いといえる。

一九三三年の唐戸市場に関していえば、規約的発想としては旧来のやり方や設備では対応できなくなったというその点が最も表面的な理由であろうし、デフレの時期だけに下関で大規模な工事をして市民の内需を刺激したいという切実な理由も挙げられよう。これらのことは、当面、分かりやすい唐戸市場の自己表現に結びつく。解体前の市場の姿がその物理的表現だし、運営形態はその機能的表現である。さらに、景観、町並み整備などの直接的な敷衍効果へと展開していき、その展開の行き着く先には時の政府の、ひいては、世界全体のその時代における拡大政策が見えるのはすでに述べた通りである。

では、二〇〇二年の唐戸市場とその周辺はどのような自己表現として見えるだろうか。

発想の原点は、二、で述べた諸特徴や各施設のコンセプトにある。まず、新しい唐戸市場は、市民の台所、観光の拠点、周辺景観との連続性をそのコンセプトとした。また、カモンワーフは、主に観光に関連する諸事業を行う場所であるが、「食べて遊んで海を感じる」とされるように、発想の軸には海、すなわち関門海峡がある。

すなわちこれらの諸施設は、規約的な発想としては、海を素材とした観光開発と産業育成というコンセプトを軸にしているといえる。それは、背景となる周辺からいえる。唐戸湾の栈橋を挟んだ対岸には、一九五六年（昭和三十一年）の開館時には東洋一と謳われた下関水族館を移設し、二〇〇一年にオープンした市立しものせき水族館海響館がある。

ところで、その規約的発想にすでに自然発生的発想としての海という概念が前提されていることを見逃してはならない。それが、自然発生的要因の強いものだけに、そこから他の発展へと繋がることが予想される。

すなわち、唐戸の新たな諸施設の背景を歴史的に遡ると下関駅付近から唐戸に至る海岸線の埋立てを伴う再開発事業、すなわち、一九八九年（平成元年）に埋立て着工した、あるかぼーと下関計画に出会うことになる。この大規模事業は、かつての下関港修築工事に匹敵する大事業であることはいままでもない。そこには港湾都市に必ずといってよいほど附属する内需拡大の最も効果的な方法が見える。すなわち、港湾都市の財政が逼迫したときには多くの場合、港湾の修築を手がけるのである。それは、土地が増えるという分かりやすい財産獲得であり、工事に関わる諸事業が潤うことにもなる。いま、二つの時代における共通項のひとつがデフレだということを喚起すれば、拡大政策のひとつがこの再開発事業であることが明らかになる。

唐戸市場と並んで唐戸地区再開発の象徴は先に述べた市立しものせき水族館海響館なので、小論考察の手掛かりをこの施設にも求める。

平成一三年四月一日付けの江島潔市長による開館挨拶には、市立しものせき水族館海響館は「海のいのち、海といのち」をメインコンセプトにしていると述べられ、ひとつには、「水の生き物たちの生態を通して自然と人間の関わりあいや命のすばらしさ、自然保護の大切さについて理解を深め」という、自然に触れ合い自然保護を考える目的が述べられ、いまひとつには、対岸の門司港レトロ地区

と連携した「海峽まるごとテーマパーク」の核、すなわち、観光の拠点としての目的があると述べられる。特に後者においては、明確に「下関活性化の起爆剤」とさえ述べられているのである。下関の拡大政策の方向がこの観光にあることが示されているが、挨拶にはさらに「く海峡の恵みと歴史の心を翼にくく ひかりかがやく快適環境都市・しものせき」の実現に向けて、という現在の市のコンセプトと、それに関わるキーワードとして「ひとがきらきら」「くらしがいきいき」「まちがぐんぐん」が添えられている。

さらに市立しものせき水族館海響館の館内コンセプトとして述べられているのは、海の乱開発に対する警鐘である。「このあたりですこし立ち止まって、海について海のいのちについて海といのちについて考えてみませんか？」という問いかけは、かつての拡大政策とは逆の印象さえ与える。

このようなコンセプトが規約的な性格を持つことはいうまでもないが、その内容そのものに海の自然性を強く意識しているという点では、自然発生性を取り込んだ性格を持つと理解される。このような統合の仕方は一般に無理が少なくストレスを生みにくいのである。

なお、これらの市長挨拶や館内コンセプトに関連して、唐戸地区を門司港レトロ地区と結んだ歴史の町として捉える興味深い試みや、唐戸を玄関とする新町沿いの谷の頂点、東駅付近、向洋町のかつての錬兵場に、今日は、下関運動公園、陸上競技場、梅光学院大学などの重要な文化施設が充実し、その途中には、図書館、病院、官公庁が集約していることを思えば、この谷全体を下関の文化的な中核として再開発する企画など、さまざまに考察を広げる余地は十分残っているが、紙幅の関係上、その問題は後日に考察する。そして、こ

こで、唐戸市場を焦点とした考察に絞れば、これらの市長挨拶や館内コンセプトを背景として、唐戸市場の再開発も行われたことがいっそう現実的に理解できるのである。

すなわち、二〇〇二年の唐戸市場再開発の背景となった拡大政策は、下関という場所の自己限定としては、土木事業による景気刺激という目先の目的に、本来下関が持っていた絶対的な場所の条件とそこから派生した歴史的条件を素直に受け止めようとする方向性を持つ。それぞれの施設が、ゆとりあるコンセプトを持ち、ゆったりした観光を目的としている。それは、すでに地球資源は限界があるとして量的開発よりは質的充実を目指す世界全体の自己限定の流れにも適合している。振り返れば、それらの歴史の方向性を常に鋭く捉えてきたのが、下関の先進性であった。

さて、当面、問題の本質は述べたが、最後に将来に向けて、詳論の内容から述べられる限りにおいて、当面考えなければならぬことをまとめる。

これまでの、歴史的趨勢からいえば、大枠的には質の充実というべきであろう。これまでの考察から、下関という場所や、それを背景とした唐戸という場所の自己表現的なコンセプトの妥当性は評価できる。それに従って、今後ハードの充実は続くであろうが、それらを支える資金は、それら投資した設備が生みださなければならぬ。そのためにはそれらの施設の運営が重要な要素であるが、単に施設があれば人が来るといふ時代は終わっている。また、何かひとつだけで人が来るといふものでもない。それら諸々を考えて小論の考察の過程から、今後に開くキーワードとして、「癒し」「教育」「文化」「連携」「交流」「生活」を挙げたい。

「癒し」については、風景や歴史、気候の適合性についてはすでに述べてきた通りである。そして、北九州、福岡という、合わせて二〇〇万〜三〇〇万人を擁する大都市圏から一時間以内で来ることができる下関である。また、関西からも一泊程度の気楽な距離である。「癒し」を意識した諸施設、それは、観光に限らず、ケアハウスの発想までを含めた設備や運営が求められる。

「教育」については、諸施設それぞれに可能性がある。小中高の学校教育の場所として利用することに留まらず、近くの大学と連携して研究や教育を行う環境はすでに存在する。さらに、意識の高い下関における社会人のリカレント教育の場という充実の方向も期待できる。

「文化」についても同様であるが、芸術、サブカルチャーやスポーツなどもう少し幅広く考えて企画提供する。映画祭や文化祭といった企画が定着できるように工夫する。数多い下関ゆかりの文化人の発掘や繋がりを企画することなどが求められる。

「連携」は教育や文化なども関連するが、下関の歴史的財産は数多い。それらと、物理的にも心理的にも連携できることを考える。単独の施設や企画よりは総合的かつ統合的な企画のほうが発展のエネルギーは増加する。

「交流」とは、国内外との交流を意識することである。すでに国際会議なども開催されているが、経験を積むことによって運営も洗練される。また、対岸北九州や福岡、そして、大陸との交流はすでにノウハウのあるところである。統合的に目的を定めつつ、豊かな交流を行う。

「生活」は、過去の拡大政策では少々荒っぽく、物質的な豊かさ

をのみ強調されてきたきらいがあるが、今日ではやはり、実感としての豊かさ、本当の便利さを追求しなければならない。それにはハード、ソフト両面にわたる合理的な統合が求められるが、その意味では下関は場所としてふさわしい規模である。

このように、未来図を描くと、やはり問題は唐戸を超えて下関へ、ひいては世界全体へと広がっていく。それが場所論であることはいうまでもない。そして、序でも言及したように、小論のような哲学的思考は、現実の各論にそれぞれ展開してこそ意味がある。各位のご尽力を期待すると共に、これら総合的な発想の中で、唐戸市場の再開発が、多くの方々にとっての真に豊かな発展へと結びつくことを心から祈る。

(あらき まさみ 日本赤十字九州国際看護大学)

注

- (1) 中村元監修・峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、二〇〇〇年、四二二〜四二三頁、および、荒木正見・徳永哲共著『場所論と人間行動 —演劇・ドラマ・教育相談—』中川書店、二〇〇〇年、四〜三八頁
- (2) 『ゼンリン住宅地図一九九〇 下関市No.1』ゼンリン、一九八九年一月
- (3) 『ゼンリン住宅地図二〇〇二 下関市No.1』ゼンリン、二〇〇一年八月
- (4) 『幻の童謡詩人「金子みすゞの世界」展図録』朝日新聞社、一九九九年
- (5) 下関市市史編修委員会編『下関市史 原始—中世』下関市役所、昭和四〇年
- (6) 下関市市史編修委員会編『下関市史 市制施行—終戦』下関市役所、昭和五八年

- (7) 下関市市史編修委員会編『しものせきなつかしの写真集 下関市史・別巻』下関市役所、平成七年
- (8) 『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、二〇〇二年
- (9) 日本歴史大事典編集委員会編『日本史年表』河出書房新社、一九九三年
- (10) 日比野丈夫編『世界史年表』河出書房新社、一九九八年
- (11) 小島恒久編『一九三〇年代の日本』法律文化社、一九八九年／一九九〇年

以下のホームページを参照した。

<http://mirai.city.shimonoseki.yamaguchi.jp>

<http://www.kanonwharf.com>

<http://www.kaikyokan.com>



写真1 2002.12.15 現在の唐戸市場



写真2 2002.12.15 唐戸市場のにぎわい

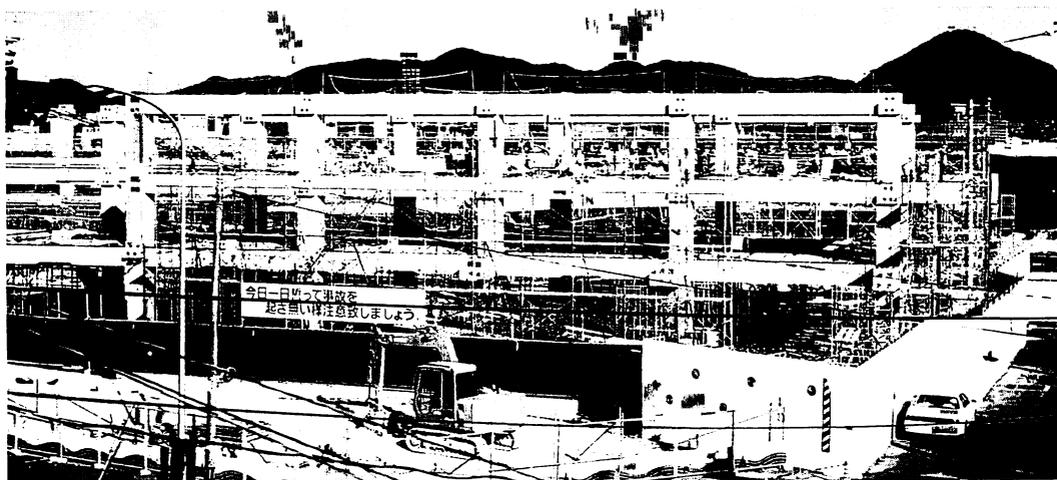


写真3 2001.12.5 建設中の唐戸市場



写真4 ▶

2001.12.5 旧唐戸市場3・4号棟



◀写真5

2001.12.5 旧唐戸市場1号棟

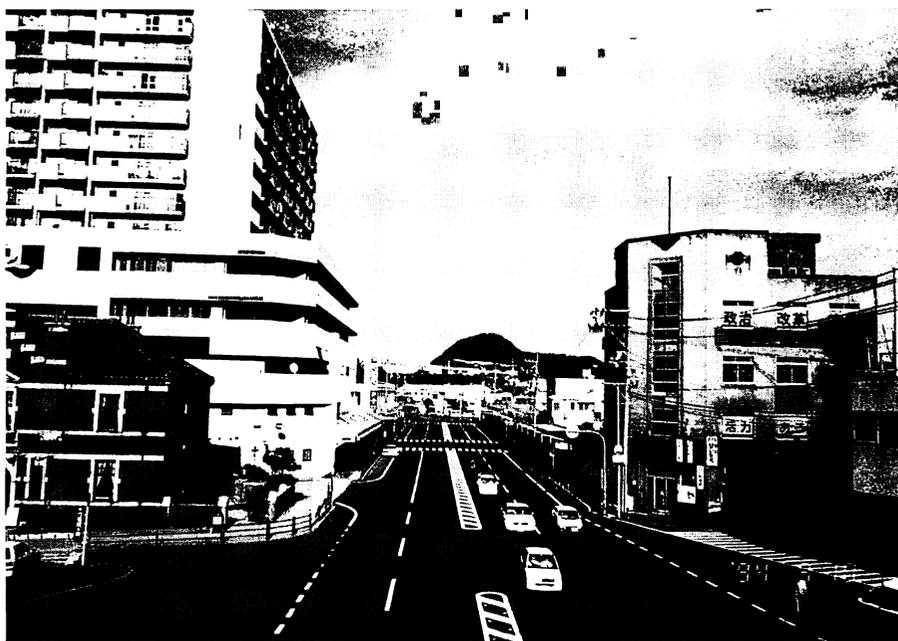


写真6 1994.9.10 唐戸交差点から見る旧唐戸市場



写真7 2002.11.8 唐戸交差点から見る新唐戸市場